

本州高地帯のゴマシジミ* —— 1 新亜種の記載を含む ——

高 橋 昭
愛知県大府市大府町ガンジ山 38-267

Maculinea teleius BERGSTRAESSER at high elevation in the Central Honshū,
Japan, with description of a new subspecies

AKIRA TAKAHASHI

ゴマシジミ属 *Maculinea* VAN ECKE, 1915 は、ユーラシア大陸の北部に分布域をもつシジミチョウ科の一群で、日本にはゴマシジミ *M. teleius* BERGSTRAESSER, 1779 と、オオゴマシジミ *M. arionides* STAUDINGER, 1887 の2種を産す。

この属の幼虫は、幼虫期の前半は草食性であるが、後半はアリの巣の中に入り、アリの幼虫を食べて成長し、蛹化までをアリの巣の中で過す特異な生態をもっており、両種とも日本が分布の東南限となり、日本での分布は局地的である。

オオゴマシジミは渓谷性の種で地方変異に乏しいが、ゴマシジミは明るい山間の荒地草原、火山裾野草原、泥炭地草原などに棲息する草原性の種で、地方変異に富んでいる。

筆者は、本州産ゴマシジミのうち、飛騨山脈や加賀白山山麓の尾根に生じた高標高の草原に棲息するゴマシジミを調査し得たので、その知見を報告し、その特異な斑紋と生態とから、低地産のものとは別の亜種として扱うのが妥当と考えるので新亜種として記載する。

日本のゴマシジミの分布と既知亜種

日本のゴマシジミの最初の報告は DRUCE (1875)⁴⁾ によるもので、彼は "*Lycaena kazamoto*, n. sp." として記載した。この標本の産地は、"Yokohama, Japan (PRYER)" となっているが、横浜付近にはゴマシジミは分布しないことから、PRYER の採集品を横浜で入手したものと考えられる。*L. kazamoto* は、その後ゴマシジミ *Maculinea teleius* の亜種 ssp. *kazamoto* と整理されているが、このような経緯から、本亜種の正確な type-locality は現在のところ不明である。

因みに "*kazamoto*" の名の由来は、江崎悌三氏⁵⁾ によれば長崎県壱岐島の "勝本" で、SIEBOLD の名著 "Nippon" の第2版の日本地図に勝本を Kazamoto と誤って印刷されているのを DRUCE が見て、この地名をゴマシジミの記載に借用したものといわれる。

その後、松村松年^{17~21)}、渡 正監³³⁾、白水 隆²³⁾ 氏らにより亜種名が命名され、現在下記の6亜種が知られている²⁶⁾。〔 〕内は type-locality を示す。

Maculinea teleius BERGSTRAESSER, 1779 ゴマシジミ
ssp. *ogumae* (MATSUMURA, 1910)¹⁷⁾ 北海道東部〔千島〕
ssp. *matsumurai*, SHIRÔZU, 1953²³⁾ (=ssp. *jezoensis*, MATSUMURA, 1926)¹⁸⁾ 北海道西部〔札幌〕
ssp. *shiriyensis* (MATSUMURA, 1927)¹⁹⁾ 青森県〔青森県下北郡尻屋〕
ssp. *tsugaruensis* (WATARI, 1937)³³⁾ 青森県〔青森県東津軽郡滝内村(現青森市)三内〕
ssp. *kazamoto* (DRUCE, 1875)⁴⁾ 浅間、富士〔不詳〕
ssp. *daisensis* (MATSUMURA, 1926)¹⁸⁾ 中国地方〔鳥取県伯耆大山〕

* 要旨は1967年10月2日、第14回日本鱗翅学会大会(東京)で講演した²⁸⁾

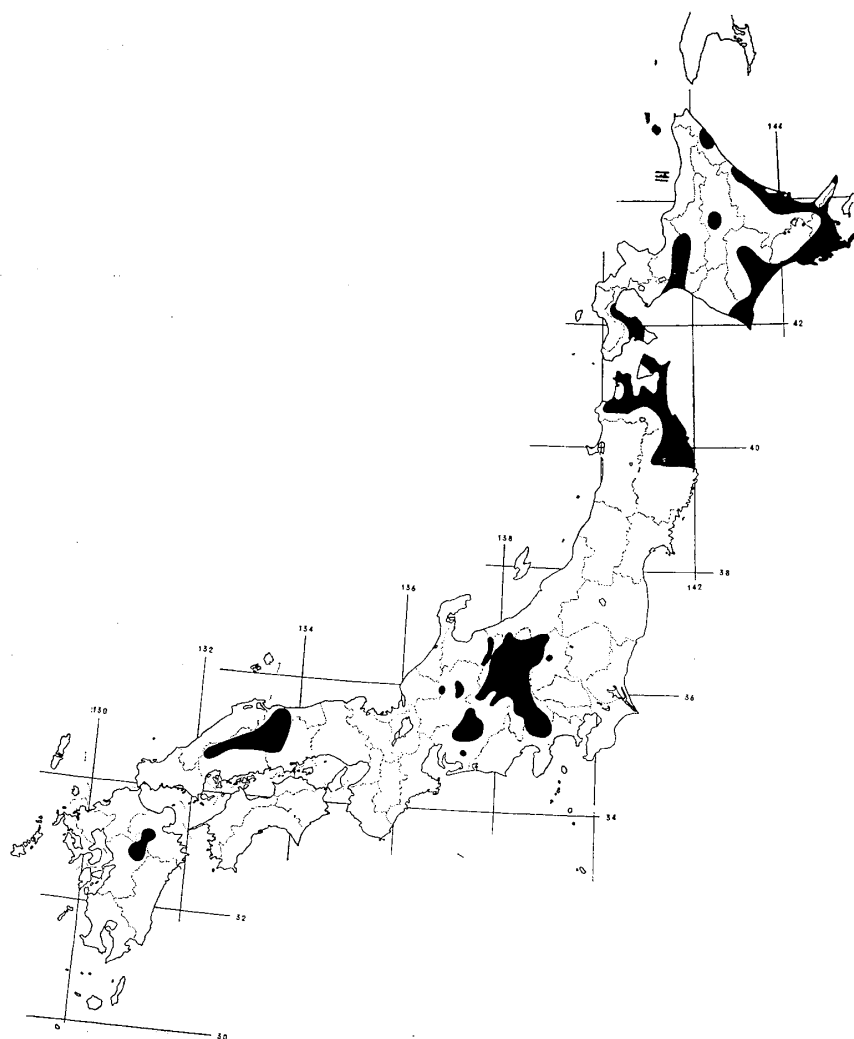


Fig. 1. Distribution map of *Maculinea teleius* in Japan.

これらの諸亜種の特徴は白水 隆氏²⁴⁾²⁵⁾によれば次のようである。

ssp. ogumae は前翅表外縁の黒帯が細く、第1室で切れ、翅表の青藍色部は白味を帯びる。

ssp. matsumurai は翅表外縁の黒帯はよく発達し、翅表、翅裏の斑紋の発達もよい。

ssp. kazamoto は裏面の地色が最も暗く、♀翅表は全く暗褐色、♂翅表は僅かに翅底部に藍色鱗を現わし、邦産諸亜種の中で全体的に最も暗化が強い。

ssp. daisensis は大形、裏面の地色は白味強く、翅表の青藍色部は明るく、外縁黒帯は幅広く、青藍色部との境界は鮮明である。

Fig. 1 には日本のゴマシジミの分布を示す。宮城、福島、富山、島根の4県からも文献記録があるが、産地、採集年月日の詳細が不明である上、近年における追認の報告もないので、分布図からは除外してある。

北海道では礼文島、利尻島、天売島、焼尻島および中央山脈より東部のものは *ssp. ogumae* の特徴をもったものが得られ、旭川、札幌一苦小牧低地帯および函館周辺のものは *ssp. matsumurai* の特徴をもつ³¹⁾³²⁾。

東北地方では青森県に分布が広く¹⁾²²⁾、岩手県盛岡市周辺まで太平洋岸に沿って分布が伸びている。津軽半島竜飛岬産の個体は斑紋が特異であるが、*ssp. shiriyensis*, *ssp. tsugaruensis*, *ssp. matsumurai* は斑紋がよく似ており、これらの異同については将来詳しい再検討が必要と思われる。東北地方の中部から南部にかけては、かなり広い分布の空白地域がある。

関東地方では、群馬県に産地が多い²⁾。赤城山頂付近のものは他の産地と隔絶されている。長野県から山梨県に

かけては分布が広く、その東南は富士山裾野草原に及び³⁰⁾、神奈川県箱根仙石原³¹⁾でも戦前に採集されたことがある。東北部は三国山脈を越えて新潟県に達する。

飛騨山脈では五竜岳以北、朝日岳以南の高地帯に産するが、この高地型ゴマシジミについては後に詳述する。岐阜県東濃地方から、長野県木曾郡南木曾町、下伊那郡平谷村、愛知県三河地方の山間湿原にもいくつかの産地がある。愛知県南設楽郡作手村は隔離された棲息地である²⁹⁾。岐阜県高山市を中心とした飛騨盆地には限られた産地がある。白山山麓の一支峰大日岳には高地型のゴマシジミを産するが、これについては後述する。

中国山地では伯耆大山、蒜山、岡山県高梁市以西、広島県西部恐羅漢山麓にかけて点在する産地が知られている。山口県には分布が及んでいない。

九州では久住高原と阿蘇山にのみ産地が知られ、四国からは記録がない。

日本のゴマシジミの食草

ヨーロッパではワレモコウが食草として知られているが、日本産もワレモコウおよび同属のナガボノシロワレモコウの2種が食草として知られている。

日本に自生するワレモコウ属には下記の7種と、いくつかの変種がある。

Rosaceae バラ科 *Sanguisorba* ワレモコウ属

S. stipulata RAFIN. タカネトウウチソウ

var. *rishiriensis* (MAKINO) HARA リシリトウウチソウ

var. *Kishinamii* HARA ユキクラトウウチソウ

(その他いくつかの変種がある)

S. hakusanensis MAKINO カライトソウ

S. officinalis L. ワレモコウ

var. *pilosella* OHWI ウラゲワレモコウ

S. tenuifolia FISCH. var. *parviflora* MAXIM. コバナワレモコウ

var. *tenuifolia* FISCH. ナガボノアカワレモコウ

var. *alba* (TRAUTV. et MEY) KITAM. ナガボノシロワレモコウ

S. grandiflora MAKINO チシマワレモコウ

S. obtusa MAXIM. ナンブトウウチソウ

S. albiflora (MAKINO) MAKINO シロバナトウウチソウ

北海道および東北地方では“ワレモコウ”と記された報告もあるが、最近の報告はすべてナガボノシロワレモコウであり、おそらくほとんどの地域で、ナガボノシロワレモコウが主要産卵植物となっているものと推察される。利尻島ではリシリトウウチソウに産卵するか否か、今後の観察が必要である。

ナガボノアカワレモコウは産卵植物としての記録がない。岐阜県郡上郡高鷺村蛭ヶ野湿原(標高約 900 m)にはナガボノアカワレモコウの大群落があり、ヒメシジミ、オオヒカゲなどの湿原に棲息する蝶を産するが、ゴマシジミは発見されていない。関東、中部、中国、九州では原則的にはワレモコウに産卵する。

飛騨山脈高地帯では、ワレモコウとカライトソウの混生地にゴマシジミが発生し、この両種に産卵し、白山山麓大日岳ではワレモコウがなく、カライトソウのみ自生し、本種はこれに産卵する。

飛騨山脈のゴマシジミの産地

飛騨山脈のゴマシジミの最初の発見者は故細野 淳氏で、1951年に初めて報告された¹¹⁾。氏の発見された産地は唐松岳八方尾根の黒菱小屋の上、ころび石付近である^{11~14)}。次いで、1965年8月8日、浜 栄一氏が同じく白馬山群の罫ヶ岳東麓で2♂♂を採集され⁸⁾⁹⁾、この2♂♂は白水 隆教授により原色図版で図示され、ssp. *kazamoto*に近い別亜種の可能性が示唆された²⁵⁾。また、(1967年?)8月4日、五竜岳遠見尾根遠見小屋付近からも採集された¹⁰⁾。上記の3カ所については、採集個体数は多くはないが、その後も確認の報告がある⁷⁾。

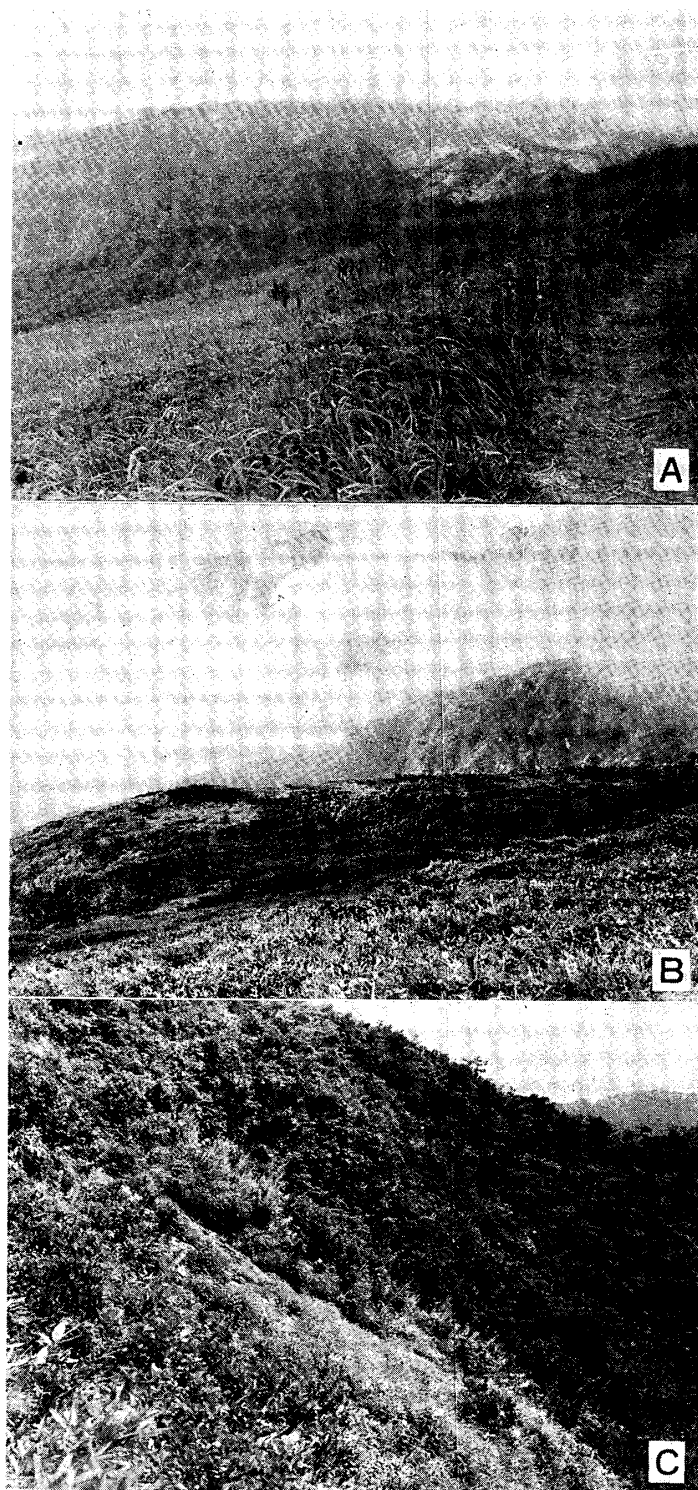


Fig. 2. Habitats of *Maculinea teleius hosonoi* TAKAHASHI.

- A & B: the Hida Mountain Range. C: the Hakusan Mountain Group.
- (A) Mt. Asahi, Gorin Ridge, altitude 1700 m, Niigata Pref. *Sanguisorba hakusanensis* is found in company with *S. officinalis*.
- (B) Mt. Karamatsu, Happô Ridge, altitude 1900-2000 m, Nagano Pref., Type-locality. Two *Sanguisorba* plants are found.
- (C) Mt. Dainichi, altitude 1600-1700 m, Gifu Pref. Only *S. hakusanensis* is seen.

筆者は朝日岳五輪尾根（標高約 1700 m）および唐松岳八方尾根（標高約 1900～2000 m）でゴマシジミの発生を確認した²⁸⁾。朝日岳五輪尾根は新しい産地である。五輪尾根、八方尾根、遠見尾根はともに飛騨山脈の南北に走る主稜山脈から、東に向かって張り出した支稜で、ゴマシジミの産地は、高原状のやや広い稜線で、湿性の高山草原がよく発達し、ニッコウキスゲ、ヨツバシオガマ、チングルマなどとともにワレモコウおよびカライトソウの 2 種の *Sanguisorba* 属の植物が混生し、ゴマシジミはこの 2 種のいずれにも産卵する (Fig. 2, A, B)。白馬鎚ヶ岳の産地は、筆者自身まだ確認していない。

白山山彙大日岳のゴマシジミの産地

加賀白山の主峰御前峰（標高 2702 m）から南方に張り出す主稜の南端に大日岳（標高 1709 m）がある。この地のゴマシジミの発見者は沢谷史郎氏で、1966 年 8 月 7 日、数頭のゴマシジミを採集され、筆者に連絡された。

筆者は翌 1967 年 7 月 30 日に大日岳に登り、大日岳主峰近くの稜線付近にある小型の湿性草原にゴマシジミが少数ながら確実に棲息しているのを観察し得た。この産地はニッコウキスゲが咲き、カヤツリグサ科が主として生えた明るい草原で、ワレモコウは見られず、カライトソウが咲いており、これに産卵するゴマシジミも観察した²⁸⁾ (Fig. 2, C)。

白山山彙は石川県、岐阜県飛騨国および美濃国にまたがっているが、ゴマシジミの産地は岐阜県（美濃国）郡上郡北濃町に属する。なお石川県からはゴマシジミは現在のところ記録がなく、白山周辺山麓にもゴマシジミの棲息は知られておらず、大日岳のものは孤立した産地となっている。

本州高地帯に発生するゴマシジミの生態上の特異性

ゴマシジミは北海道や青森県では低標高の泥炭地に好んで棲息しているが、本州中部地方以西では低山帯から中山帯の丘陵地の荒地、湿原、あるいは火山裾野草原に発生する。その垂直分布の中心は中部地方山地では標高 600～900 m、三河東濃丘陵地域では標高 400 m 前後で、200 m 以下で採集された例もある。これに対し、飛騨山脈や大日岳では 1600～2000 m の高標高の、しかも尾根筋の草地在が棲息地となり、この高度に匹敵する産地は群馬県赤城山山頂付近の産地の 1400～1600 m しか知られていない。

次に注目すべきことはカライトソウが産卵植物となっていることである。これまでゴマシジミの産卵植物としてはカライトソウの記録がない。飛騨山脈ではワレモコウとカライトソウとが混生しており、ゴマシジミは両者に産卵しているが、大日岳ではカライトソウのみが自生し、他のワレモコウ類が見られないので、本種が唯一の産卵植物となっている。飛騨山脈高地にはこのほかタカネトウチソウが自生しているが、今後産卵植物になり得るかどうか注目したい。

カライトソウは白山山彙から発見されたもので、白山山彙と飛騨山脈の白馬岳を中心とした北部地域のみから知られ、カライトソウの分布と、高地型ゴマシジミの分布が一致していることは興味深い。

赤城山のゴマシジミの産地にはワレモコウが自生しており、カライトソウなど他のワレモコウ属の植物はない。岩手県早池峯山にはナンブトウチソウが特産種として知られるが、筆者の調査ではゴマシジミは発見できなかった。

本州高地帯ゴマシジミ成虫の形態

Ssp. *kazamoto* の type-locality は上述のように現在不明であるので、長野県北佐久郡、松本市、木曽郡北部産のものを ssp. *kazamoto* と認めて比較の対照とした。

北海道産の ssp. *ogumae* には小型のものがあるが、高地帯ゴマシジミはこれとほぼ同等の大きさか、これよりも小さく、翅形は全体としてやや丸味を呈する。本州の他の産地および九州産に比し明らかに小さい。

翅表の青藍色鱗の発達は悪く、ssp. *kazamoto* に近く、♀では青藍色鱗を全く欠如する個体がある。一般にゴマシジミが黒化して行く場合、翅表外縁の黒帯が翅底部に向かって拡大しながら黒化し、これとともに翅底部も黒化の程度が増して来るが、高地帯のゴマシジミは、翅表全体がびまん性に黒化する。このため一見ほとんど黒化し

た個体でもなお外縁の黒帯の幅は広くなく、この黒帯のすぐ内側にも青藍色鱗が残り、その内方の円形黒紋列も認められる。痕跡的な青藍色鱗は中国地方産の *ssp. daisensis* や、東濃三河丘陵地方産（とくに愛知県南設楽郡作手村産）のように青白色を帯びることがなく、深く沈んだ色調をしている。

裏面はうすずみ色で、*ssp. kazamoto* のような強い褐色味を呈することはない。ゴマシジミは小型化すると、一般に裏面の点状紋も小さくなる傾向にあるが、高地型のものは特にこの傾向が明瞭で、裏面外縁近くにある二重の紋列のみでなく、中室端と外縁の中間の斑紋列すらも消失する個体がある。中室内に点状紋を有するものはない。

本州高地型のゴマシジミは前記のような諸特徴によって、低標高地産のものとは明らかに区別できるので、新亜種として命名記載する。新亜種名は飛騨山脈唐松岳八方尾根から高地帯のゴマシジミを最初に発見された 故細野淳氏 (1907~1955) に献呈する。

Maculinea teleius hosonoi* TAKAHASHI, *ssp. nov.

Description.

Uppersides. ♂. Ground colour dusky black, lusterless, generally almost unmarked. Some individuals have trace of deeper blue shade with faint black spots in the postdiscal series. ♀. Both wings uniformly dusky black without blue suffusion, unmarked.

Undersides. ♂♀. Dark grey. Black markings of postdiscal series small and obscured. Double marginal markings often lacking.

Length of fore wing: ♂♀ 13-20 mm. Smallest among known subspecies from Honshū (Main Island) of Japan.

This new subspecies is easily distinguishable from the light blue races. It resembles *ssp. kazamoto*, but differs in the following points. *Ssp. kazamoto* is the largest subspecies in Japan, upper-side velvet blackish-brown with lusterless black markings, underside brownish with conspicuous markings in both sexes, occurs at an elevation of about 500-1300m above the sea.

Distribution. Central Honshū, Japan: Northern part of the Hida Mountain Range (Mt. Asahi, Mt. Shirouma-Yari, Mt. Goryū) in Niigata and Nagano Pref., Mt. Dainichi of the Hakusan Mountain Group in Gifu Pref. High alpine meadows from 1600m upwards. Very local.

Larval food plants: Only *Sanguisorba hakusanensis* in Mt. Dainichi; both *S. hakusanensis* and *S. officinalis* in the Hida Mountain Range (Rosaceae). Later in ants' nests.

The new subspecific name is dedicated to the late Mr. ATSUSHI HOSONO, the first discoverer of this race from the Hida Mountain Range.

Holotype ♂. Mt. Karamatsu, Happō Ridge, Nagano Pref., 5.viii.1965, A. TAKAHASHI leg.

Paratypes. 6 ♂♂ 2 ♀♀, Mt. Karamatsu, Happō Ridge, 5.viii.1965, A. TAKAHASHI leg., 4 ♂♂ 1 ♀, Mt. Asahi, Gorin Ridge, Niigata Pref., 3.viii.1964, A. TAKAHASHI leg. 4 ♂♂ 1 ♀, Mt. Dainichi, Gifu Pref., 7.viii.1966, S. SAWATANI leg., 7 ♂♂ 4 ♀♀, ditto, 30.vii.1967, A. TAKAHASHI leg.

All specimens are preserved in the author's collection.

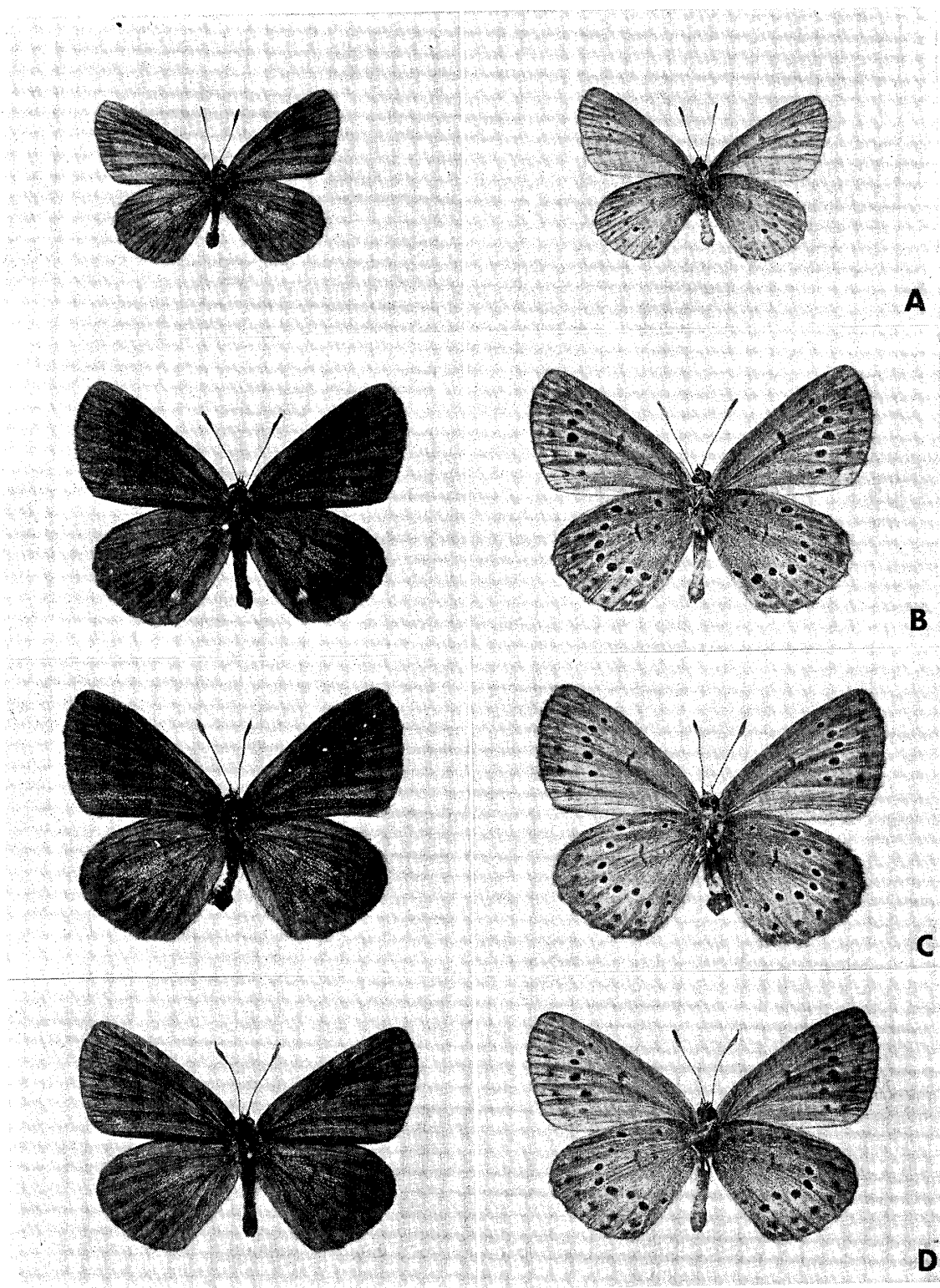


Fig. 3. *Maculinea teleius hosonoi* TAKAHASHI. A, B, C, ♂. D ♀.
Mt. Karamatsu, Happô Ridge, (Type-locality),
Nagano Pref., Aug. 5, 1965.

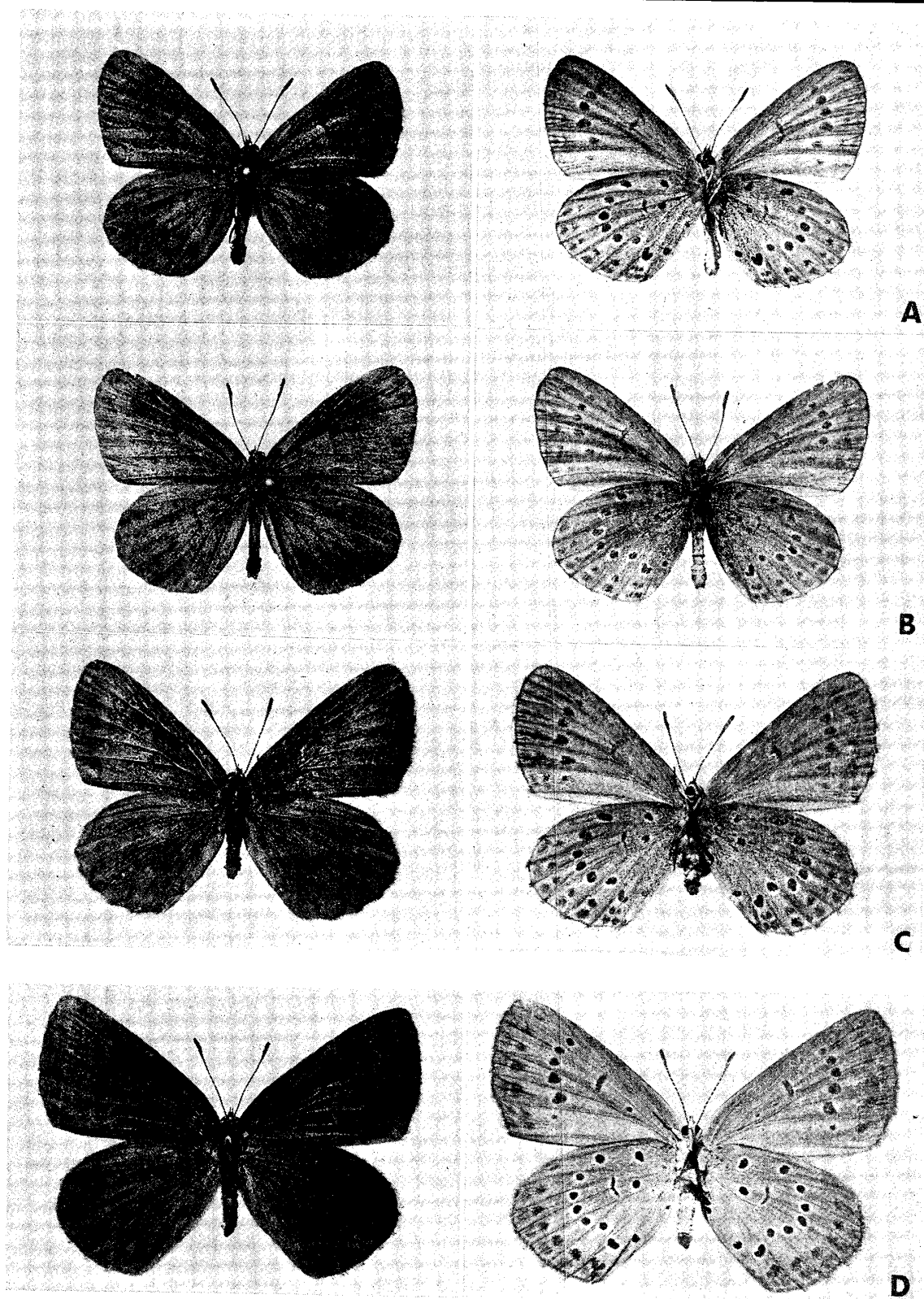


Fig. 4. *Maculinea teleius*

ssp. *hosonoi* TAKAHASHI (A & B: ♂, C: ♀)

Mt. Asahi, Gorin Ridge, Niigata Pref., Aug. 3, 1964.

ssp. *kazamoto* DRUCE (D: ♂)

Kiso-Fukushima Chô, Kiso Gun, Nagano Pref., Aug. 14, 1964.

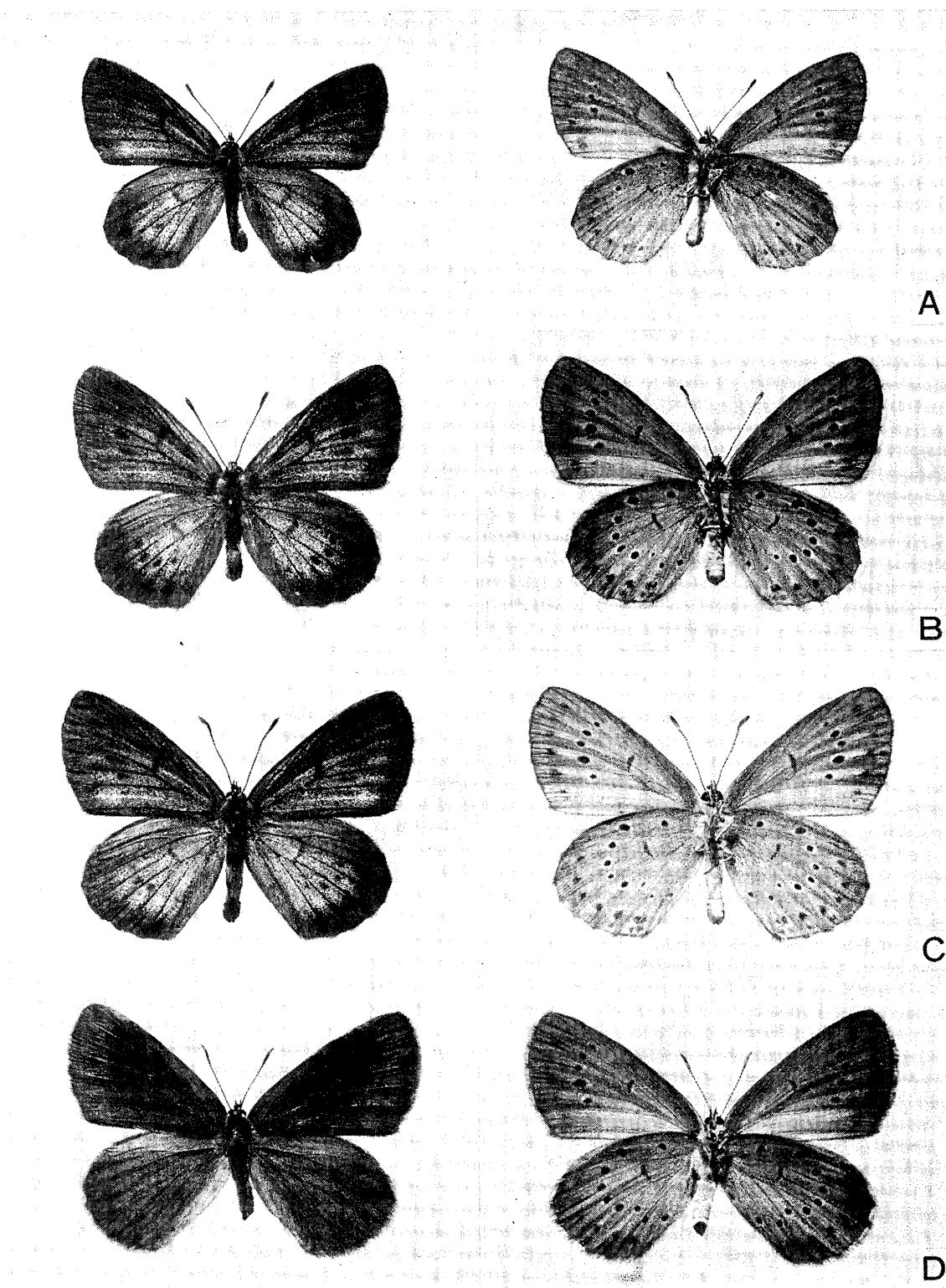


Fig. 5. *Maculinea teleius hosonoi* TAKAHASHI. A, B, C, ♂. D ♀.
Mt. Dainichi, Gifu Pref., July 30, 1967.

付 記

日本の高標高地に産するゴマシジミのうち、赤城山の標本は十分検討し得なかった。筆者所蔵の僅かな個体では *ssp. hosonoi* に類似した点もあるが、今後の検討に待ちたい。

ゴマシジミは朝鮮にも産し、*ssp. hozanensis* (MATSUMURA, 1927)¹⁹⁾ が褐色系のものである。この type-locality は咸鏡南道の豊山で、この地は 2000 m 以上の標高をもつ山岳地帯である。詳しい産地名の記載がなく、また標高も記されていないが、朝鮮半島の低地に広く分布する *ssp. coreana* (MATSUMURA, 1926)¹⁸⁾ は青色系であり、このように低地産のものが青色系となり、高地系のものが褐色系になることは *M. arion* など *Maculinea* 属の二、三種についてヨーロッパでも観察されている。

しかし、日本のゴマシジミについて、*ssp. hosonoi*—*ssp. kazamoto*—*ssp. daisensis* の 3 亜種について分布と黒化度の両面からも関連性をみると、これら 3 亜種のうち垂直分布において中間帯に棲息する *ssp. kazamoto* がもっとも黒化しており、cline の現象としては理解しがたい。ヨーロッパの *M. arion* は幼虫末期の食餌として通常 *Myrmica scabrinoides*, *M. laevonoides* の両種のアリの幼虫を好み、このときは成虫が大きく色彩が鮮明であるが、これらの成虫にまじってみられる小型で、色彩がくすんだものは、幼虫時代を *Donisthorpia flava* の巣で送った個体であるとされる。日本のゴマシジミの幼虫期についての研究ははなはだ少ないが、成虫の大きさ、色彩と宿主の種類については興味深い問題点があるように思われる。

かつて筆者は本州産ヒメシジミの *ssp. micrargus* とゴマシジミの青色系のものとが、またヒメシジミの *ssp. pseudaeagon* とゴマシジミの暗色系 (*ssp. kazamoto* と *ssp. hosonoi*) とがそれぞれ比較的類似した分布を示していること²⁷⁾、さらにヤリガタケシジミ (アサマシジミの高地型) とゴマシジミ *ssp. hosonoi* (ゴマシジミの高地型) とが、また狭義のアサマシジミとゴマシジミの *ssp. kazamoto* とがやはり似た分布をとっていることを報告したことがある²⁸⁾。これら 3 種の草原性種の亜種関係や相互の分布の類似性については、今後生態的な観点からも分析することが必要と考える。

末筆ながら、懇篤な指導をいただいた九州大学教授白水 隆博士に心から感謝する。また大日岳の産地を教えられた沢谷史朗氏、その他援助を賜った河原光一、清沢晴親、葛谷 健、篠原 豊、高橋真弓、館山一郎、山田英雄の諸氏に厚く感謝の意を表する。

文 献

- 1) 阿部 東, 1971. 青森県の蝶類分布. 月刊むし (1): 8-16.
- 2) 赤城昆虫同好会, 1967. 群馬県の蝶・蛾. 赤城 8(1): 1-135.
- 3) 朝比奈正二郎・朝比奈英三, 1931. 八月下旬箱根乙女峠付近の蝶. Zephyrus 3(3/4): 286.
- 4) DRUCE, H., 1875. Descriptions of new species of diurnal Lepidoptera. Cist. Ent. 1: 357-363.
- 5) 江崎悌三, 1954. 二つの蝶の学名のいわれ. 虫界速報 (31): 9.
- 6) 江崎悌三・白水 隆, 1951. 日本の蝶. 新昆虫 4(9): 1-117.
- 7) 月刊むし編集部, 1971. 採集地案内, ゴマシジミのすべて. 月刊むし (5): 19-20.
- 8) 浜 栄一, 1965. 鍾ヶ岳で採れたシジミチョウ 2 種. まつむし (18): 7-17.
- 9) 浜 栄一, 1965. 東筑・南北安曇の蝶類分布資料. 松本むしの会年報 (3): 18-27.
- 10) 原 幸夫・安藤 勝, 1967. 遠見尾根調査報告. まつむし (26): 38-39.
- 11) 細野 淳, 1951. 北安曇産動物目録, 調査研究報告 (2), 北安曇郡誌改訂委員会, 長野県北安曇郡大町.
- 12) 細野 淳, 1952. 長野県北安曇地方の蝶, 雑誌信濃 4(3): 31-44.
- 13) 細野 淳, 1952. 長野県の蝶類とその採集地 I, 北安曇地方. 信州昆虫学会特別号: 1-10.
- 14) 細野 淳, 1953. 北アルプスの蝶相. 新昆虫 6(7): 2-9.
- 15) 清沢晴親, 1963. 冠着山一帯の山地を境とした南北地域に於ける数種の生物分布に就いて. まつむし (3): 1-5.
- 16) 清沢晴親, 1971. 解明を要する北安 (北アルプス) の蝶. 山と博物館 16(2): 4.
- 17) MATSUMURA, S., 1910. Lycaeniden Japans. Ent. Zeits. Stutt., 23: 221-222.
- 18) MATSUMURA, S., 1926. Some new and unrecorded Lycaenids-species from Japan, Corea and Formosa. Ins. Mats. 1(1): 23-31, Pl. 2.

- 19) MATSUMURA, S., 1927. A list of the butterflies of Corea, with description of new species, subspecies and aberrations. *Ins. Mats.* **1**(4): 159-170, Pl. 5.
- 20) MATSUMURA, S., 1927. Some new butterflies. *Ins. Mats.* **2**(2): 114-118, Pl. 3.
- 21) MATSUMURA, S., 1928. New butterflies especially from the Kuriles. *Ins. Mats.* **2**(4): 191-201.
- 22) 室谷洋司・阿部 東, 1962. 青森県の蝶類. 青森県の蝶の研究 (2): 1-294.
- 23) SHIRÔZU, T., 1953. New or little known butterflies from the northeastern Asia, with some synonymic notes II. *Sieboldia* **1**(2): 149-159, Pl. 19.
- 24) 白水 隆, 1965. 原色図鑑日本の蝶: 135-136, Pl. 25, 北隆館, 東京.
- 25) 白水 隆, 1966. 標準原色図鑑全集, 蝶・蛾: 58, Pl. 28, 保育社, 大阪.
- 26) 白水 隆, 1968. 昆虫標本ラベル [蝶の部—4]. 昆虫と自然 **3**(5): 付録.
- 27) 高橋 昭, 1958. ヒメシジミ 2 “亜種” の混棲. 佳香蝶 **10**(35): 23-27.
- 28) 高橋 昭, 1967. 本州高地帯のゴマシジミ. やどりが (51/52): 30.
- 29) 高橋 昭・葛谷 健, 1956. 中部東海地方産蝶類目録第3報. 佳香蝶 **8**(29/30): 1-124.
- 30) 高橋真弓, 1961. ゴマシジミの地理的変異についての問題. 蝶と蛾 **12**(1): 1-8.
- 31) 館山一郎・小野 決, 1961. 北海道産蝶の解説 (6) シジミチョウ科 (3). *Coenonympha* (11): 206-209.
- 32) 館山一郎・小野 決, 1961. 北海道産蝶の解説 (7) シジミチョウ科 (4). *Coenonympha* (12): 223-226.
- 33) 渡 正監, 1937. 本邦産 *Lycaena euphemus* の一亜種について. *Zephyrus* **7**(1): 26-28, Tab. 3.

Summary

Maculinea teleius shows very marked local and individual variation, and six subspecies have been hitherto described from Japan.

In this report a new subspecies, *hosonoi* of *M. teleius* is described. The habitats of this subspecies are light and wet meadows at altitudes of 1600-2000 m in Central Japan, but very local and scarce, known from only a few localities. This subspecies represents the minimum development in size. It resembles the brownish form, ssp. *kazamoto* of moderate elevation, but the latter is larger, uppersides are more heavily suffused blackish brown, and undersides strongly ocellate.

The larval food plants of the new subspecies are *Sanguisorba hakusanensis* and *S. officinalis* (Rosaceae); the former has never been recorded as a larval food-plant, the latter is known as the sole one in the Western Japan.

Generally speaking, blue races of the genus *Maculinea* occur at low or moderate altitudes, while dark forms at higher levels in alpine region. Variation in the extent of dark suffusion is, however, clinal as to *M. teleius* in Japan.

ニトベミノガに寄生するヤドリバエについて

嵐 洪

福岡市中央区六本松四丁目 九大教養部生物学教室

ニトベミノガ *Mahasena nitobei* MATSUMURA に寄生するヤドリバエとして、筆者は先にムラタヒゲナガハリバエ *Bessa fugax* (RONDANI) を報告したが (Pulex, 49: 198), その後もう一つの記録を知ることができたのでここに報告しておく。

Exorista humilis MESNIL, 1946

2♂♂, 長崎県松浦市, 11. vi. 1969 (羽化), ニトベミノガ幼虫 (1 ex.) より, 池崎善博採集。

Exorista humilis という種の寄主について、筆者はミノガ、チャミノガ、ネグロミノガの3種のミノガを記録したが (Sieboldia, 4 (3): 154), ここにもう1種のミノガが加わることになり、これまでの知見ではこの種はミノガ科に選択的に寄生を行なうようにみえる。

筆者は、日本およびその近隣地区のヤドリバエの研究を行なっているが、蝶や蛾の飼育の際に得られたヤドリバエについて、同好諸兄の御協力をお願いしたい。ニトベミノガの天敵について貴重な記録を寄せられた長崎県立松浦高等学校池崎善博氏、ミノガの同定をお願いした九大教養部三枝豊平氏に厚くお礼申し上げる。